談話における言葉の前提関係

——相手の言葉を認知する場合——

李　　東傑

要約

口語中的語句前提関係

李　東　傑

前提是談話者双方話語得以相互理解的己知信息。

尽管一般可将前提大致分為語義前提和語用前提両種，但是，実際上，在談話的理解過程中，前提並非一定根拠語義，語用的区分對句義理解發生主次，先後作用。

一個句子的前提関係，往々構成複数個前提関係群，面複数個前提常常同時對句義理解發生影響。

那麼，複数個前提関係群之中各前提之間保持何種関係；在何種情況下，何種前提関係對句義的理解起関健作用；外語学習者為理解對方話語應該首先掌握何種前提関係？

本文希望在一般前提研究的基礎上，對上述問題進行帰納，加以討論，作出説明.

一、始めに

前提（Presupposition）は従来哲学，論理学で使われて来た概念であるが，言語学では談話する双方が共に知っている基本的な知識，或いは論理やコンテクストによって言葉から推論しうる情報を指す。普通，論理的前提と総合的前提の両方を分けている。論理的前提は論理のみによって判断可能な，文が成立する必要条件となる前提関係を指すのに対し，総合的前提は語用論（pragmatics）的前提で主に言葉の使用場面の適切さと言葉使いの適合性を強調する文の成立する必要条件である。

本文は今までの前提研究を踏まえた上で，談話において，相手の言葉を認知する場合にどんな前提が要求されるか，そして，言語理解において，どんな前提がまず活性化されるか，また，外国語を中心とする言語学習者は相手の言葉を理解しようとする場合にどのような前提的な内容をまずキャッチしなければならないか，についてまとめてゆきたいと思う。

二、前提に関する意味論的研究

ドイツの哲学者，数学者 G. フレーゲ（Gottlob Frege）は「On Sense and Reference」（1892年）において前提の概念で意味論における論理現象を説明しようとした。そして，もし，何事かが主張されるならば，そこに用いられている単一，もしくは複合の固有名詞は指示をなしているという明白な前提が常にあると述べている。例えば

（1）南北戦争の後，アメリカでは黒人奴隷が解放された。

では，「固有名詞には指示される対象物（指示物）がある」と言う指摘から「南北戦争」という複合名詞が指示する事件が既に発生している事が分かる。仮にこの例文を否定文に改めても

（2）南北戦争の後，アメリカでは黒人奴隷が解放されなかった。

「南北戦争」という前提となる事実は消えていない。

そこで，フレーゲは「肯定文もその否定文も同じ前提の組を共有する」と論じた。

その後，イギリスの哲学者ラッセル（Rertrand Russell）や 論理学者 P. F. ストローソン（P. F. Strawson）等も前提に対する研究を深めた。

ラッセルは定の名詞（the emperor）と不定の名詞（an emperor）とは論理的に異なる扱いを受ける必要があると考えた。すなわち，不定の名詞は「ある物」でよいが定の名詞の方は「それしかないある物」と表すべきであると主張している。そして，定の名詞は固有名詞と同様な特質があると指摘した上，これを論理形式で表示する。

ストローソン（1950年）は「断言」と「文」を区別しようとしていた。断言は特定の状況における事実性に照らし合わせて真偽の判定を受ける。もし，指示するその物が存在していなければ肯定と否定のいずれにしても，その真理値は「偽」となるのに対し，「文」にあっては指示物の存在は「前提」として作用すると主張している。

Ruth M. Kempson は更に論理の真偽値（truth value）から前提と含意（entailment）の区別を明白に説明した。例えば

(3) That person is a bachelor.

(4) That person is a man.

文（3）と文（4）は含意関係である。つまり，文（3）の中に文（4）が含まれ，お互いに条件となっている。そして，文（3）が真であれば文（4）も真のはずである。逆に，文（4）が偽であれるならば文（3）も偽である。ただ，文（3）を偽としたら文（4）は真，偽と二つの可能性があると考えられる。「That person is not a bachelor」と言った場合にその人がもちろん男性であるがもうすでに結婚しているという意味に取れるし，又，その人がもともと男性ではないことにもなるからである。その一方，

(5) The King of France is bald.

(6) There is a King of France.

の場合，文（5）は文（6）を前提としていることが分かる。文（6）が真であれば文（5）ももちろん真であるが，文（5）は偽であっても文（6）は依然として真である。ただ，文（6）を偽としたら文（5）は真とも偽とも言えない無意味な文になってしまうということが大きなポイントになる。つまり，含意の場合は

a）文 A が真であれば，含意 B は真である。

b）含意 B は偽であれば文 A も偽である。

c）文 A が偽であれば，含意 B は真でも偽でもある。

これに対して前提は

d）文 A が真であれば，前提文 B は真である。

e）文 A が偽であっても，前提文 B は真である。

f）前提文 B は偽であれば，文 A が真でも，偽でもない，判断の付かない文になる。

以上のように，前提関係では文 A の真偽にかかわらず，前提 B が保持される。そこで，文 A は文 B を前提とすることになる。

Ruth M.Kempson は前提は焦点（focus）に影響され，焦点が変われば，前提も変わると説明している。焦点は会話する場合において，発話者が言いたいポイントとなる，新しい情報であり，ある状況の中で最も重要な情報を担う部分である。具体的に言うと例えば，次の文があるとする。

(7) 誰がここへ自転車を置いたんだ。

ここで，この文に対し，(8) のように答えるとピントのはずれた文になってしまう。

(8) A さんは昨日ここへ自転車を置きました。

つまり，この場合，

「x がここへ自転車を置いたんだ」なので，「誰かここへ自転車を置いた」は前提になっているわけである。そのため，当然「A さんが置いた」「それは A さんです」と要求される。

そして，焦点の位置を変えれば「x が，x へ，x を，x した」とすると，これに応じて「誰か

が」,「どこかへ」,「なにを」,「どうした」というように文の前提も複数化することとなる。

(9) A さんは毎月給料を袋ごと奥さんに渡すのだ。

この文において，それぞれ「給料」,「毎月」,「奥さん」を焦点 x の位置に置けばその前提となる文は次の通りになる。

(10) A さんは給料をもらっている。

(11) A さんはサラリーマンである。

(12) A さんは奥さんがいる。

その後，80年代ごろに，前提タゲット（presupposition triggers）が研究された。L.kartunen は『前提現象』(presupposition phenomenon) で前提タゲットを三十一種類ほど挙げている。

例えば，動詞類として含義動詞（implicative verbs），叙実動詞（factive verbs），状態変化動詞（change of state verbs），評価動詞（verbs of judging）の四種類があるほかに修飾語，副詞類，複文等も取り上げられている。日本語や中国語の場合も同じ例がある。例えば，動詞類の場合

(13) 太郎が来なかったのは残念だ。

(14) 太郎は花子が東大の試験に合格したのを知っていた。

ここの「残念だ」,「知る」は叙実動詞で，文中の下線の部分は文の前提部でもある。

(15) 从此他們成了好朋友。(前提：今まで良い友人ではなかった。)

(16) 由於對大自然的破壊，森林被　伐，鳥類少了。(前提：今までは鳥は多かった。)

ここでは「成了」(なる)「少了」(少なくなる) 等程度，変化を表す言葉は前提タゲットになる。

そして，「又」(また),「再一次」(もう一度),「尚未」(まだ),「重新」(再び),「已経」(既に)「果然」(やはり) 等の副詞も前提を提示する言葉になる。

(17) あの変な人はまた来た。(前提：少なくとも一度来た事がある。)

(18) 我也要買氣球。(前提：既に誰かが風船を買った人がいる。)

ただ，こういう場合は副詞そのものについての理解に注意する必要がある。副詞の理解の違いによって異なった前提を導き出す事があるためである。例えば，次の (19) の「again」を日本語に直すと二通りになりうる。

(19) I forgot to telephone her again.

a　私は彼女にもう一度電話するのを忘れた。

　　前提：私は彼女に少なくとも一度電話をした。

b　私は彼女に電話するのをまた忘れた。

　　前提：私は彼女に電話することを少なくとも一度忘れた。

中国語でも「我忘了給她再打一次電話」そして「我又一次忘了給她打電話」と「再」,「又」の二種類に訳すことになる。

そのほか，完成，実現の時間等を表す，「～てから」,「～た後」「～た直後」等の言い方は前提関係を提示する。

(20) 我到美国後就一直努力学英語。(私はアメリカに行ってからずっと，努力して英語の勉強をしている)

前提：私はもうアメリカに行っている。

(21) 離陸した直後に飛行機は事故で墜落した。

前提：飛行機は離陸した。

日本語の受け身を表現する「～て＋結果」の文は前提関係を表す。

(22) 昨夜は遅くまで隣の子に泣かれて困りました。

前提：昨夜は遅くまで隣の子に泣かれた。

(23) 庭の前に高いビルを建てられて目の前にある森が見えなくなった。

前提：庭の前に高いビルが建てられた。

文中にある連体修飾語，連用修飾語は常に前提を表す。

(24) いずれも今日13日に予定されている都議会本会議で可決成立するのは確実だ。

前提：[連用修飾語] 今日13日に都議会本会議が予定されている。

(25) 昨日，京都から買ってきた漬物をみんなに分けて食べる事にした。

前提：[目的語] 昨日，京都から漬物を買ってきた。

(26) 今年度上半期の生産計画の超過達成は間違いないらしい。

前提：[連体修飾語] 今年度上半期に生産計画がある。

複文で前提を表す場合は例えば下記のようなものがある。

(27) 私がほしいのはこんなつまらないデータではない。

前提：私は何かがほしい。

前提タゲットは文における論理的前提関係をはっきり標記する役割があるため，文の前提関係を判断する場合の分かりやすい目印となる。

三、前提の語用論的研究

しかし，意味論的にのみ見たのでは，場合によって文の前提関係を十分に説明しきれない時がある。Levinson (1983) は次の例を挙げている。

(28) Sue cried before she finished her thesis.

(29) Sue died before she finished her thesis.

(30) Sue finished her thesis.

文 (28) の前提タゲットは before という語による複文節であるため，文 (30) は (28) の前提になるが (29) の前提にはならない。Sue が論文を完成する直前に死んだと言うのは Sue が論文を完成したということを前提にしていないからである。この場合，文の前提は言語コンテクストによって取り消された (defeasibility) わけである。文だけでなく言葉の場合でも前提が無視されたり，取り消される時がある。

日本語では「内」と言う概念はもともと〈一定の限界の中〉〈区域内〉のような前提を有するが「電車にご注意，白線内でお待ちください」，「電車がまもなく参ります。危険ですから白線

の内側でお待ちください」の場合はお客さんの方に視点を置いて，「自分の側」と言う意味の使い方だと言える。つまり，「内」と言う言葉の持つ意味素的前提が言語使用のコンテクスト—視点によってキャンセルされたのである。中国語では誰がスポーツの試合に出るかと聞くときに(31) のように言うのが普通である。

(31) 今天，誰上場？（今日は誰が出場しますか）

しかし，地方によっては次のようにも言う。

(32) 今天，誰下場？（今日は誰が出場しますか）

そして，場合によっては，文の前提がはっきりしていても，会話のコンテクスト全体から判断しなければ文そのものの意味が分からないのがある。

(33) 電車はまもなく〜〜駅に到着いたします。右側の扉が開きます…。

では，視点と結び付けて考えなければどちらが右側かは判断が付かないであろう。言葉の前提がいかに会話のコンテクストによって影響されているかが分かる。

また，複文にある前提についての解釈のように「投射」(projection rules) の考え方で説明したところで，文の前提をうまく説明しきれない事がある。

このように，文の前提を考えるときは論理的に文の意味を分析する必要があるのみでなく，語用論的にある文が発話される場合のコンテクスト：前提の適切さ (appropriateness) と共有性 (mutual knowledge 或いは common ground) も考えなければならない。リーチ (Leech 1981) は前提に意味論的関連もあれば語用論的要素もあると考えて，ある命題は論理的条件と語用論的条件の両方が必要であると指摘している。例えば：

(34) ドアを閉めなさい。

この場合，「話者がドアを閉めてほしいと思っている」，「言われている聞き手にこの行為を実行する能力がある」，「現在ドアが閉まっていない」等を前提としていると言える。

語用前提の適切さを守ることによって初めて発話者は正確に発話し，聞き手は正確にこの発話を理解しうる。また，次の文は複数の前提を元にして発話されると考えられる。

(35) 他没有関門。（彼はドアを閉めなかった）

その前提として例えば，

(36) 有人関了門，但不是他。（誰かがドアを閉めたが彼ではない）

(37) 他是幹了什麼事情，但没有関門。（彼が何かをしたがドアを閉めなかった）

(38) 他関了什麼，但不是関門。（彼が何かを閉めたがドアではなかった）

(39) 他怎麼様了門，但没有関。（彼がドアをどうかしたが閉めたのではない）

(40) 他打算関門，但還没有関。（彼がドアを閉めようとしているがまだ閉めていない）

のように，ある前提群 (Presupposition pool) (Venneman 1975) が存在するのである。このような場合，話手がどの前提を元に発話したかを理解していないのでは文の真の意味が読み取れなくなる。いわば，前提の適切さは相手の言葉を理解する上の重用なポイントとなるのである。

ところで，ある発話にこのように複数の前提が盛り込まれているならば，我々は実際に相手

の言葉をどうして理解するのだろう。例えば,「すみません」と言う文があるとする。下記のように発話者の発話と共に以下の意味が読み取れるであろう。

(41) すみません。(誰かいませんか)

共有前提:店に店員がいない,お客さんが来ると呼ぶ。

(42) すみません。(ご親切に有り難うございました)

共有前提:何かしてくれたり,してもらったりした場合。

(43) すみません。(うっかり足を踏んだりして申し訳ありません)

共有前提:お詫びをする場合。

(44) すみません。(ちょっと道を開けてもらえませんか)

共有前提:自転車などで道を通る

ここでは前提を共有するのが言葉理解の決め手となるのである。また,

(45) 先生,ベルが鳴りました。

この文は講義に夢中になっている先生に気付かせて授業を終わらせようとする発話だと,その場にいる人なら理解するにはさほど難しい事ではない。なぜかというと,この場合は生徒にしろ先生にしろみんな「ベルが鳴ると授業が終わる」と言う,唯一と言ってもいいほどはっきりした前提を共有しているからである。

四、言葉を理解するのに必要な前提関係及びその特徴

先に述べたように言語学者 Venneman (1975) は前提を前提群 (Presupposition pool) と考えた上で,その構成を具体的に言葉的前提 (the complete part of the discourse itself),世界知識前提 (general knowledge),特定コンテクスト前提 (situative context) と分類している。言葉前提は基本的に論理的に頼るもので語用的コンテクストとの関わりは薄いがそれにしても文脈(実際,文脈をも談話における語用的コンテクストとして見る考え方がある)の依存性が見られる。これに対して世界知識前提は言葉自身の構造からは推論出来ず,談話のコンテクストと堅く結びついているため,語用的前提に属する。特定コンテクスト前提は分脈や言葉の焦点,視点等に応じて生じるその場その場の語用的前提である。

以下では具体的にこれらの前提は中国語や日本語においてどのような形で現れているか,そしてそれぞれどのような特徴が見られるかについて少し触れて見たいと思う。

1、言葉的前提

言葉的前提としては音韻・音声的前提,意義素的前提,単語前提,文法的前提,文の前提,分脈などが考えられる。

文字の場合は一回読んで分からなかったとしても繰り返し読んだり,辞書を利用することが可能であるのに対し,音声は時間性がある上に,一回性の特徴が強い。そのため,相手の会話を理解しようとするならばまず,この音声前提をキャッチしなければならないであろう。特に外国語の場合は相手の発音に聞き慣れなかったり,聞き取れなかったりするとそれだけで,相

手の言葉を理解しなくなる恐れがある。そして，音声・音韻について適切な前提を持っていなければ相手の伝えようとするところを上手く読み取れない場合がよくある。日本語では同音異義は「掛け言葉」の前提になっているから，この同音異義の知識を身に付けていないうちは相手がかけて言うところを理解しないであろう。

もちろん，音声前提をキャッチすると言っても，いかなる場合においても話し手の発話を全て聞き取らなければならないというわけではなく，言葉の焦点に合わせた前提を聞き逃がさなければそれで良い場合さえある。現に中国語を母語にする人が京劇を聞いて分からないセリフがあったとしても，京劇の鑑賞に差し支えないのと同じ事だと言える。

文法的前提は母語の人に全く問題化されない場合が多い。母語だから，無意識の内にも前提が働く。ところが，外国語の場合は文法的知識が話し手の言葉を理解する時の大事な前提となるのである。

(46) 昨日，ずいぶん電話させてもらった。

と言っただけで，「話し手から聞き手に電話した」，「相手の呼び方を避けた」，「相手との待遇表現を明確にしている」などの対人的な内容まで分かってくる。中国語に直すとここの「誰が」「誰に」に当たる部分をはっきりさせるのが普通である。

(47) (訳文) 昨天，我給你打了很多次電話。

言い替えれば，日本語にある代名詞「あなた」「君」などの意味素前提は中国語の「你」よりもっと対人的な制約があると分かる。言葉の前提についてはもう少し例を挙げよう。

(48) 今日のパーテイーをお開きに致します。

と「お開き」を使うが〈めでたい場合〉等の前提を忘れ，いつでも「終わり」のつもりで「今日の学校はおヒラキか」とやるとおかしくなるのである。

日本語の「はい」はよく中国語の「是」に訳されるが実際に「はい」の場合は〈分かった〉〈納得した〉〈引き受けた〉などの前提以外にまた，〈聞いている〉のような相づちの前提があるにもかかわらず，すぐに「是」(〈引き受けた〉) と早合点した結果，後で気をもんだりするのもこうした中国語，日本語の意義素的前提をうまく理解しなかったためだと言える。

2、世界知識前提

言語認知に働く世界知識前提として一般常識のほかに社会通念，風俗習慣，文化事情等が挙げられる。そして，こう言った知識を元にして初めて語の意味を判断することが出来るのである。つまり，世界知識前提というのはある言葉を理解する場合の必要条件として考えられる。「A さんの息子さんは……」と言うとき，この「A さんは結婚している」ことが普通前提となっている。また，電車に乗ってどこかへ行くとする。それで，どの電車に乗るか，どこで乗換えをするか，また券売機でどのように切符を買うかなどの一般知識は，我々が電車に乗るときの言語行動に大きく影響すると考えられる。このような前提に乏しい人，例えば，余所からの人とか，初めての人とか，或いは，今まで使い慣れている状況が急に変わって面食らう人などは，これらの前提を必要条件とする会話を耳にするとき上手く理解の行かないことがあるであろ

う。

マスコミの影響の大きい現在ではテレビのコマーシャル，映画主人公の口癖，有名な芝居のセリフなど，しばしば日常の会話に引用されて使うことがある。中国語の場合，

(49) 昨天幹什麼了？脸紅什麼？……怎麼又黄了？（昨日，何をしたか。なぜ，顔が赤くなったか。……どうしてまた，黄色くなったか。）下線の部分はよく知られる文化大革命中の京劇のセリフである。このようにして相手のことを冗談半分に聞いている談話雰囲気が作られる。しかしこのセリフの背景——この場合，セリフの混じった言葉を理解する必要条件が分からない人なら，この言葉の真義を感じるのは難しいであろう。実際に日本の落語や漫才，お笑いを聞く外国語学習者が面白く感じないのもここに理由があるのではないかと思われる。もちろん，母語の人，例えば，方言の人たちでさえ，もしこういった言葉の中に含まれている前提を把握していなければ，外国語学習者と同様にその面白さが分からない。同じ中国人でも広東語をしゃべる人には標準語の「相声」（落語，漫才）を聞いても笑わない人がいるのである。

社会通念は普段はっきりした形が見えないが，一種の意識前提となる場合がある。中国では車は道の右側を走り，人も同じように右側を歩く。そのため，たとえ左の歩道を歩いていたとしても，この左側歩道の右を歩くのが決まりのない決まりだと，みんなの常識的な意識として守られている。それで，中国人は日本では車が道の左側を走るのだから，人も同じように左側を歩くのだと信じて疑おうともしない。実際に廊下を歩く人を見ると，決まって左側を歩くとは限らない。いつも相手に気付きながらその場その場に応じて歩く方を選ぶのは「赤，止まれ」「青，進め」と同じようにすでに社会通念になっているという。こうのような社会的意識前提を知らないのでは，このような前提を裏にする言葉を理解し得ないであろう。

また，人々の動作，ジェスチャー，礼儀作法の表現もこの前提になる。例えば，

(50) かれは頭を横に振って見せた。

と言う文を理解しようとすると頭を横に振るというジェスチャーは，その言語社会ではどういう意味を表すかと言う前提を知る必要がある。

3、特定コンテクスト前提

以上の前提は総合的に，そして談話のその場その場に応じて表れてくるのである。中国語では

(51) 天下雨了。（雨だよ，雨が降ってきたよ）

と言う文を理解しようとするならば，次のコンテクストに合う意味を選択しなければならない。

(52) よかった，農作物が助かった。

(53) しまった。今年の収穫はだめになった。

(54) 今日の運動会は中止になるか。

(55) これで，少し涼しくなるだろう。

(56) 明日は寒くなるだろうな。

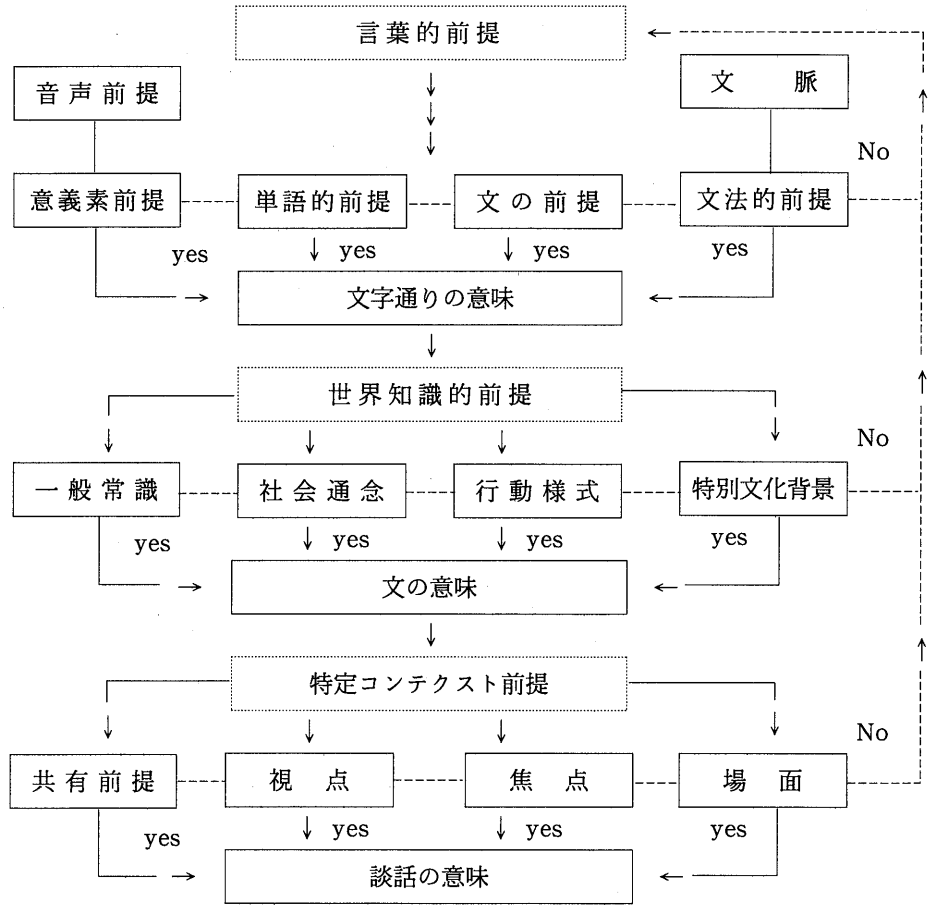
(57) 又，水害になるのか。

(58) やっと春が来た。

一体，話し手がどんなつもりで発話したのかは，特定コンテクスト前提を抜きにしては判別が付かない。例えば，「干ばつでずっと雨がなかった」，「雨が長く続いている」，「運動会の計画がある」，「暑い夏が続く場合」，「秋の深まる季節」，「雨が多くて水害になりそうなとき」，「冬が過ぎ去ろうとする季節」のような共有前提があれば，どういう時にどのような意味になるかが分かるのである。具体なコンテクストさえあれば共有前提が無意識の内にでも働いて我々は相手の言おうとするところをキャッチするのである。

五、前提へのアクセス

以上のような談話を行う場合に，我々は相手の言葉を理解しようとする。相手の言葉を理解しようとするならば，相手の言葉に含まれる前提を意識的に，或いは無意識的に理解しなければならない。そこで，実際に我々は相手の言葉を理解するに当たってどのように前提を読み取っているのか，また，どのような前提から先に読み込まれ，活性化されるのか，我々の言葉に関する認識はどのような道のりを辿って来たのかを，次のような図にまとめてみることにする。



談話の場合，相手の発話を理解するのに音声が最も大事なポイントであることは言うまでもない。聞き取れなかったところを無視して会話を進めたり，もう一度相手に繰り返すことを求めたりする場合が確かに可能であるが，音声を聞き取れなかっただけで相手の言葉を完全に理解出来なかったことも少なくない。つまり，言葉の音声前提をキャッチ出来ないとそのまま，談話が進まなくなる恐れがある。言葉前提については前にまとめてきたように，まずその論理的部分を正確に把握する必要がある。

世界知識的前提は言葉に直接に関連する基本知識がほとんどであるだけに，この分をすべて身に付けようとしてもとても無理なことである。かといって，この部分がうまく認知されないならば，言葉の理解も中途半端になったり，理解の深みのないまま終わってしまうことがある。

特定コンテクスト前提は基本的に以上の二種類の前提を元に働くものであり，次元の高い理解とつながっているのであろう。この部分が読み取れないと，いわゆる「言葉は分かるが意味は分からない」ような結果になりかねない。

以上，言葉の理解を中心に前提を大きく三種類に分けて説明したが，実際は言葉の理解に関する前提問題はもっと複雑なところ，はっきり区分けの出来ない部類，場合によって変わる部分などがあると考えられる。いずれにしても前提に対する認識が我々の言葉認知に役立っていることは間違いないだろうと思う。

参考書類：
Levenson, C (1983) *Pragmatics* New York : Cambridge University Press
Leech, G (1981a) *Semantics* Harmondsworth : Penguin
毛利可信（1980）『英語の語用論』大修館書店
安井稔（1978）『言外の意味』研究社
向明友（1993）「試論話語前提分析」『外国語』

（原稿受理 1996 年 4 月 12 日）